NARUTO ～ナルトの義理の姉は十尾の少女であって最強忍者～　♪♪

魔歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＲＵＴＯ　～ナルトの義理の姉は十尾の少女であって最強忍者～　♪♪

【Ｎコード】
Ｎ８０７３Ｗ

【作者名】
魔歩

【あらすじ】
幼い頃、バケ狐の事件によって両親を無くしてしまった主人公。
そんな両親の形見と言ったら小さい時、我愛羅とお揃いで貰った青いペンダントに十尾の封印物だけだった。

設定です☆

設定からやりたいと思います！！

☆天野璃南（璃南⇒莉奈）

・ナルトの義理の姉でもあって、十尾でもある。

・尾獣にもなる。ナルトが赤の狐となり、莉奈が水色バージョンの狐になる。

【性格】

・誰に対しても優しく、笑顔を絶やさない。

・怒る時は半端無く恐ろしい↑ｗｗｗ

【容姿】

・黒髪でいつもポニーテイルかサイドテールにして縛っている。

・瞳は澄んだ緑色。

【服装】

黒と紫をモチーフにした感じで…

・ブラック／ボーダー色のレイヤード風ドルマン配色ワンピを着用。

【能力】

・五大性質、医療忍術を使う。

・写輪眼、白眼に似て【劉冬眼】＊【龍樺眼】を使用する。

★砂漠の我愛羅と同じ特質で【水】と【氷】が盾となる。

【口寄せ】

リクとしてポケモンのエンテイ、ライコウ、スイクンを口寄せする。

三体の前足（右側に）木の葉の額当てがある。

・ドラゴンも口寄せをする。

劉冬眼について
劉冬眼はテレパシーにもなったり、耳と目を通じて実際にその場の話や映像を映し出される。
未来を見る事も出来るから戦闘中にはすごく役立つ。

龍樺眼
万華鏡写輪眼と似て、相手に幻覚を見せる。
龍樺眼はどんな強力な相手でも一発で死なせる事も出来る。

闇月ナイト
・璃南、歌怨と同じスリーマンセルの一人。
・チーム1の俊足でもある。
・片手でも印を結び、容赦無く戦う。

【性格】
・毒舌な所もあるけど、シカマルのようにめんどくさがりな一面も。
・嫌いなものは”弱い奴”

【容姿】
・多分ですがポケモンの謎の人物だったかな…その人似。

【能力】
・属性が”炎”と闇でもあって火遁をほとんど使う。
・血継限界の血が少し流れている。

【口寄せ】
・主に狼など野獣などを口寄せする。

音殺歌怨
・右頬には何かの紋章みたいなのがある。（ジェラール似）
・サクラみたいに人一倍の観察力と洞察力を持っている。
・怒る時は物凄い殺気を出す。
・結構強い

【能力】
・主に属性は闇と雷。
・うちは一族では無いけど写輪眼や万華鏡写輪眼を使用する。

【口寄せ】
・悪魔などをも口寄せする。（w）

【第１１班の司令官】
雨野マコト
・天然な所もあり、時間にはいつも遅れる。
・図星になる事もしばしば；；；
・だが、特訓・任務になると厳しくなる。

【容姿】
・中忍試験の時の音隠れの額当てをした大蛇丸に似ている。

【能力】
・……不明。

００１＊忍術学校！！！

始めまして天野璃南です。

両親を無くしてから１３年。

私はそれでも挫けずに義理の弟でもあるナルトと頑張っています！！

お父さん・お母さん、天国で私達を見守っていて下さい！！！

良く劉冬眼の練習で過去を見た事があって…話によれば、ナルトのお父さんと私のお母さんが兄妹だったらしくて…クシナさんとお母さんは赤ちゃんが物凄く欲しかったらしくていつもいつも赤ちゃんの話をしてたらしいんだ。

お父さん（夜影ハヤト）は風影三代目様の孫であってお母さん（天野屡樺）は雨隠れの里のくノ一だったらしいの。

余り昔の記憶は覚えてないけど…この青い氷のようなペンダントが私を守ってくれるらしいの。

お母さんが私を守ってくれるように氷と水を用いてペンダントを亡

くなる数日前にくれたんだって。

＝ナルトの部屋＝

璃南
「ナルト。起きて」

そんなナルトは夢を見ているらしく、寝言を言っている。

ナルト
「もう…食べれないってばよｚｚｚ」

（はぁぁぁぁあ…やりますか。）と心の中で言い、印を結んだ。

＜＜影操り＞＞

ムクッとナルトの上半身が９０℃ピッタシになって座っていた。

ナルト
「ハハハ＾＾；；；璃南姉ちゃん（滝汗）」

璃南
「ナルト＜言＜貴方は何時になったら起きる気？」

ナルト
「ゴメン！！だって夢のラーメンがすごくおいしくって…ついつい；；」

璃南
「言い訳無用」

＜＜頭叩き起こしの術＞＞

そう印を結び、言うとナルトは自分の手で自ら頭を叩いてた。

それが私自作の頭叩き起こしの術。

以前前にも忍術学校の入学式で遅刻しそうになった時、私自作のこの技を編み出した訳ですｗｗｗ

＝ＩＮ学校・教室＝

璃南
「おはよー」

「「おはよー」」

いの
「やっぱり今日もサスケ君はかっこいいわね～／／／」

女2
「ナイト君だってかっこいいわよぉ／／／」

女5
「それいうなら歌怨君もよぉー！！！／／／」

サクラ
「何言ってるの！！サスケ君が一番よッ！！！／／／」

朝、来ると必ずこれ何だよね…；；；

このクラスのほぼ、全員がナイトや歌怨やサスケに目が行くと言うか…

私もその一人の女ですが…そういうのは興味無いと言うか…ｗｗｗ

ナルト
「本当、サスケはうざいってばよ」

璃南
「……嫉妬、…まだまだ子供ねwやっぱり」

何て私は聞こえないように呟く。

イルカ先生もやって来た事だし、皆席に戻った。

（飛ばしますw）

イルカ
「さて…いよいよ明日は卒業試験だな。
毎年お馴染み”分身”の術のテストをする」

ナルト
「えぇぇぇぇ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！？」

イルカ
「（怒）ナルトッー！！！お前は三年も卒業テストで落ちてるだろーがッ！！！！」

と、訳の分からない喧嘩が始まり…一人ずつイルカ先生に変化するテストをやる事になった。

＝ＩＮ次の日・卒業試験当日＝

イルカ
「えー…名前を呼ばれた者から隣のクラスに来るように」

出席番号順で座る為、私は一番前に座っていた。

天野だしねｗｗ

そんな後ろの席はナルトとヒナタが座っていた。

ナルト
「今年こそ絶対に受かってみせるってばよ！！！」

ヒナタ
「ナルト君。。。頑張ってね／／／」

ナルト
「おうwあっ、、璃南姉ちゃん、呼ばれてるってばよ」

璃南
「本当だ、、ナルト、絶対受かろうね☆じゃないとおじさん（一楽の）が私達の為にも作ってくれたラーメン、食べれなくなっちゃうよ??」

ナルト
「勿論だってばよぉぉぉ!!!!!!」

ヒナタ
「璃南ちゃん、//頑張ってね//」

璃南
「うん☆ヒナタもね☆」

＝IN隣の部屋＝

ミズキ
「どうぞ（ニコ」

璃南

「お願いします…」

<<分身の術>>

<<ボオオンッ！！！>>

イルカ
「卒業試験…合格だ」

璃南
「ありがとうございますッ！！！（涙）」

卒業試験が終われば、私は目にいっぱい涙の粒を溜めてイルカ先生から木の葉の額当てを受け取った。

それから…時は過ぎて…ほとんどの人が学校の中から出て来た。

私は日光の暑さに負けて、木の上に上りナルトが出るまでずっと待ってた。

何分間…何時間経ってもナルトは出て来なかった。

やがて生徒と親共々帰っていくけどそれでもナルトは出て来なかった。

流石に心配になった私はイルカ先生の元に移動した。

＝ＩＮ職員室？＝

璃南
「あの…イルカ先生…」

イルカ
「おや？璃南じゃないか。
卒業、おめでとう」

璃南
「ありがとうございますっ…じゃなくて…ナルト、知りませんか？？」

イルカ
「ん？ナルト？？知らないぞ。試験に落ちて凹んでると思うんだ…」

璃南

「！！？…ナルト…落ちちゃったんですか？？」

イルカ
「あぁ。所謂…分身は出せた物の中身が無い分身…だったからなー…」

璃南
「そうですか…」

「「今年こそは絶対受かってみせるってばよッ！！！」」

「「璃南姉ちゃん！俺が受かったら一緒に一楽のラーメンで祝うってばよッ！！！」」

ナルト……あれだけ受かるって…受かってみせるって…

夕方で私は一旦、家に帰った。

ご飯を作って待ってたけど夜の２３時を回ってもナルトは帰って来なかった。

＜＜劉冬眠ッ！！！＞＞

『どういう事だってばよ…イルカ先生…』

血？大きな手裏剣？？

先生がナルトを庇ってる？？？

『ナルトー。その巻物をこっちに渡せ。お前がそんなの持った所で意味は無いんだよ』

この声…ミズキ先生？

まさか…木の葉の封印書をナルトが持ち出したの！！？

気づけば私は、劉冬眼で見た森の映像とかの確認をして誰も使ってなさそうな森にやって来た。

＜＜５０Ｍ先・移動中＞＞

上忍が二人…ナルトが巻物を持って移動してる…てことは…ナルトが危ない。

何としてでも助けなきゃ…。

風を切るかのように私は猛スピードで向かった。

（（キィィィンッッ））

手裏剣がぶつかりあう音がする…。

様子を見る為、私は近くの高い木の上で様子を見た。

ナルトがいない…イルカ先生とミズキ先生が戦ってる…

それにイルカ先生が血だらけ…どういう事??

そして…イルカ先生が痛みの余り、倒れた。

それで九尾の封印がナルトのお腹に浮かび上がった。

璃南

「……」

ミズキ先生が最後のクナイで決めようとした時、ナルトがミズキ先生を殴り返した。

（※）

ナルト
「分身…が…出来たってばよーッ！！！！」

璃南
「ナルトッー！！！」

その声にビクッと身を震わせるナルト。

ナルト
「璃南姉ちゃん…その…（汗）」

璃南
「怒りたいのもあるけど…これでナルトも卒業試験、合格だね（にこ」

ナルト
「…え…？」

イルカ
「あぁ。璃南の言うとおりだな。…てかいるなら手伝いに来てくれよ」

璃南
「えーｗｗ木の上で観戦してた方が良かったかなーとｗｗｗ」

イルカ
「全く…だけどナルト、卒業おめでとう」

そういって額当てをナルトに差し出すイルカ先生。

私も優しい笑みを浮かべてナルトを見つめる。

ナルトは大泣きをしながら抱きついて来た。

璃南
「ナルト～。イルカ先生は負傷中だよｗｗｗ」

ナルト
「わわわわ（汗）悪いってばよッー！！！イルカ先生ー！！！！！」

イルカ
「アハハハハハ」

璃南
「って治療しないと！！！先生、本当に死ぬよ？」

イルカ
「それだけは駄目だッ！！！璃南頼む！！！直してくれ！！！」

ナルト
「イルカ先生ッー！！！死なないでってばよー！！！！（（抱」

璃南
「アハハハ」

お母さん…お父さん…アカデミーの卒業試験、合格したよ☆

これからも私達を見守っていて下さい

００２＊チーム発表＆初めての任務はＢランク！！？†前編†

あれから…楽しい日々は過ぎて今日は下忍としての説明会が行われた。

勿論ナルトはそれまで額当てをせずに大事にしまって置いた。

そんなナルトは今日、ノリノリ状態♪♪

ナルト
「璃南姉ちゃん！！俺ってば似合ってる？？？」

璃南
「んー…どうかなー？？」

ナルト
「えぇー！！！（泣）だけどさ！！だけどさ！！今日から下忍なんだよな～♪」

璃南
「ナルトもようやくアカデミー卒業したしね☆
一楽のおじさんもすごく喜んでたよね」

ナルト
「そうそう！！「「ナルトも、やっと合格か～」」何て泣いてたってばよな！！！」

璃南
「それ程ナルトは子供だったって事だよね～」

走り出す私。

ナルト
「子供じゃないってばよッー！！！」

と言い、その後を追うナルト。

だけどナルトは少しだけ成長したかもね♪

＝ＩＮアカデミー＝

ナルト
「♪～♪～♪～」

璃南
「それ程嬉しいの？」

隣同士で座る事となった私達。

その窓側にはサスケが座っていた。

ナルトがどうしても”サスケの横は嫌”って言って何故か私が真ん中に座る事となって…ｗｗｗ

そんな中でも他の女子達は誰が座るかとかで喧嘩中。

ナルトは御構い無しに変な不気味な笑みを浮かべる。

ナルト
「やっと下忍だってばよ～ニヒヒ～」

？？

「うわｗｗｗ何変な笑みを浮かべてんだよｗｗｗてか何でお前がここにいんだよ？？？」

ナルト
「シカマルぅ～この額当てが目に入らないかってばよ～？？？」

シカマル
「マヂかよ…お前、合格したのかよ～。めんどくせぇー」

奈良シカマル

口癖は「めんどくせぇ～」らしいんだけど…；；；

シカマルの主な属性は影。

奈良一族では「「陰操り」」　「「影真似」」など使うんだ。

ナルトは良くシカマルと一緒にいて、つい最近まではキバ、チョウジ、ナルト、シカマルの４人でイルカ先生に怒られてたぐらいなんだｗｗｗ

それ程、ナルト達は義務教育上大変だったらしいの；；；

私が熱で寝込んでた時も学校から連絡があって、「「ナルト君が○○君を殴ってます！！お姉さん！！どうにか止めてください！！！」」って本当、声からして大変そうだったけどね…。

いの
「やっぱ額当て姿のサスケ君もかっこいいわね～／／／」

女3
「それ言うならナイト君もよー！！！／／／」

女2
「何言ってるの！！！歌怨様が一番よー／／／」

三人（サスケ・歌怨・ナイト）
「「睨」」

「「キャアアアアアアアアッッッ！！！！！！！！！！」」

あぁ…逆効果だったね；；；

イルカ

「はいはい。五月蝿いぞー。席に着けー」

「「はぁーい←←」」

イルカ
「まずー…卒業おめでとう。これからは木の葉の忍びとして役に立てれる様頑張る事だ」

「「はぁーい！！」」

イルカ
「よし。今日、ここに呼んだのは三忍一組での班を作る事だ。
これから先、任務をこなして行く上でその三忍一組で協力をして強くなっていくんだ。
そして割り当てられた上忍の先生とも絆を深める事だ。」

「「はぁーい」」

イルカ
「名前を呼ばれた者は返事をするように」

「「ーーーーーーー……第七班。うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ」」

何か…ナルトの反応が面白いｗｗｗ

「「第十一班。天野璃南、闇月ナイト、音殺歌怨。以上の三名だ」」

ナルト
「闇月??音殺????」

え?何か女子は羨ましそうな瞳で見て来て、男子は目が死んでるんですけど…ｗｗｗ

イルカ
「もう少ししたら上忍の先生が来るから、それまでに待機するように」

そういい、ぞろぞろと上忍の先生が入ってきた。

「「第一班の者」」

そして…教室に残ったのは…

ナルト
「遅いってばよッー！！！」

ナイト
「黙れ。ウスラトンカチ」↑ｗｗｗｗｗ

ナルト
「何ー！！？」

サスケ
「ボソ）） ウスラトンカチ…二人」

これは聞かなかった事にしといてもいいのかな…ｗｗｗ

サクラ
「何してるのかな…」

後残ってるのは第七班と第十一班のみ。

退屈して来たｗｗｗ

（（ガラガラッ

？？？
「すまない。遅れた。第十一班の者は？」

璃南
「あ、、、はい」

何故か私達三忍はジャンプして教卓の手前で着地した。

？？？
「すまない；；；では行くとするか」

ナルト
「なッー！！！俺達の上忍まだー！！？」

教室の向こうでナルトが叫んでいたのにも関わらずナイトは「「バタンッ」」と閉めた。

＝ＩＮ噴水＝

？？？
「任務で少々遅れたが…自己紹介から…とするか」

歌怨
「まず、貴方から名乗って下さい」

???
「そうだなw俺は雨野マコトだ。好きな事は…無いな。嫌いな物は…特に無いな」

ズコッ。

ナイト
「結局分かったのって名前だけだろ」

マコト
「ハハハ。まぁ次はお前達の番だ。左端からだな」

歌怨
「音殺歌怨。好きな事・嫌いな事を教える気は無い。俺の野望はある男を”殺す”事だ」

マコト
「（…やはり…）次」

璃南
「天野璃南です。好きなというより…大事な人がいます♪
嫌いな事とかは…今はありません♪」

マコト
「（十尾の少女か…）次…って最後かw」

ナイト
「闇月ナイト。嫌いな者は五月蝿い奴に弱い奴だ」

何か…悪意のこもった自己紹介だね；；；；

マコト
「歌怨に璃南。ナイトだな＾＾よし。早速明日は任務という事だな」

璃南
「え？？早速任務何ですか？？？」

マコト
「あぁ。お前達三忍はアカデミーでの能力を見た限り、下忍とは思えない程の実力だ。
それにこの任務は火影様からの案でもある」

ナイト
「んで、何ランク？」

マコト
「Bだ」

「「B！？」」

マコト
「主に警護だな。今回の以来内容はある人物を無事に家までお届けする事だ」

歌怨
「案外…すごいな」

マコト
「だろう。Bランク共言えども中忍・上忍向けの任務だ。
それにこの任務には深い意味は無いと思ったら大間違いだ。
この任務を通してこの四人の仲を深める事も大事だ。
一人一人が自分勝手な行動をせずに、仲間を助ける思いやりの気持ちも大事だ」

「「はい」」

マコト
「よし。今日は一旦解散…だな＾＾」

「「ありがとうございました」」

と、言いそれぞれ散らばる。

＝ＩＮ家＝

冷蔵庫に張られた紙を見た。

『璃南姉ちゃん。
今日はカカシ先生の家で泊まるってばよ。
明日には戻るってばよ。それじゃーおやすみだってばよ☆』

璃南
「明日…か…私も朝早く出かけるんだよね…」

私はナルトが書いた手紙の下ラ変にも書いた。

『ナルトへ。
そっか。帰って来たら感想を教えてね☆
それと今日は任務で留守なので、冷蔵庫の中に牛乳が閉まってあるし、
戸棚の中にもカップラーメンがあるからそれを食べてね。
それと人には迷惑を掛けない事』

それだけ書くと私は自分の部屋に入って行った。

明日の…って言ったとしても期間は一週間になるかもしれないしね…忍具とかも沢山いるだろうし。

時は過ぎて…次の日。

朝早く起きて木の葉の門前に向かう。

そこが待ち合わせ場所になってるのにも関わらず…一時間経過。

歌怨
「上忍はまだかよ…」

璃南
「…はぁぁぁぁ。」

ナイト
「……あんな上忍が俺らの先生でいいのかよ…」

璃南
「…多分大丈夫…かな？」

歌怨
「疑問になってるぞ」

璃南
「アハハ＾＾；；」

沈黙になった数分後、風と共にマコト先生ともう一人、年老いたおじさんがいた。

マコト
「いや～遅れた。すまないな～」

歌怨
「今回、警護するのはそちらの方ですか？」

ナイト
「しかねえーだろｗｗ」

マコト
「まっ、そういうことだな。船橋さん。こちらが私の部下共です」

船橋
「こんなガキ共に任せてもいいのか～??」

ナイト
「なッ!?」

船橋
「よっぽどの実力だと聞いたんじゃが…」

歌怨
「……ナイト。落ち着け」

今にでも飛び出しそうなナイトを歌怨がナイトの影を踏み付けた。

マコト
「まぁまぁ。そこまでにして行くとしましょう。
明日の朝までには国の方まで届けなければ行けない訳だからなぁ～」

と言い、歩き始めた。

何故か私達三忍が前を行く事となり、真ん中には舟橋さん。

その後ろにはマコト先生が着いていた。

ナイト
「ボソ）） 何だよ。船橋って人。まるで俺ら忍びを馬鹿にしてるみてーじゃんかよ」

歌怨
「そう思うのは仕方ない事だ。俺達は俺達。船橋さんは船橋さん。思考能力は人それぞれだ」

ナイト
「何だよそれ…天野はどう思う？」

璃南
「んー…確かに人それぞれっていうか…」

ナイト

「お前も歌怨の方かよ…つまんねぇーの」

歌怨
「任務に集中したらどうだ？」

ナイト
「やんのか？」

璃南
「はいはい！！終わり！！！任務中に喧嘩してどうするの！！！」

船橋
「溜息」

マコト
「呆」

璃南
「ボソ）） 微妙に船橋さんにも舐められちゃってるし…」

ナイト
「ボソ）） アイツのあの顔、気にくわねぇー」

璃南
「だからって殺しちゃ駄目だよ！！」

ナイト
「これも任務。殺しちゃ意味が無くなるだろ」

貴方は何が目的なの？と私は聞こうとしたけど聞かない事にした。

進む事、数時間。

只今・昼食準備。

私と船橋さん以外、岩だらけの片隅で昼食の準備中。

私は主に魚とかを吊るしてる訳なんだけど…

まず火が無いと出来ない訳だし…私は水と氷なら出せるけども…

あー…どうしよう…と、困ってた時に…

ナイト
「どけよ。じゃないと、火傷するぞ？」

私はすぐさまどくと、口に手をあてて片手で印を結んだ。

＜＜火遁・火柱の術＞＞

中火ぐらいの炎でみるみるうちに火が大きくなって行った。

璃南
「あっ、、ありがとう。後は…塩とかか…」

ナイト
「塩なら…確か…」

マコト
「ほら。塩だ」

手で受け取るよりも先に水が受け止めては私の手の上に載せてくれた。

歌怨

「…今のは…」

璃南
「あぁ。今の水の事？」

ナイト
「すげーなｗｗ」

璃南
「ありがとう／／これはお母さん達の形見というか…私を守ってくれるようにしてくれたの」

マコト
「成程…つまりは無傷という事になるのか…」

璃南
「はい☆」

後編に行きます

００３＊初めての任務はＢランク！！？†中編†

マコト
「そういう人がチームにいてくれると楽しいな」

璃南
「ありがとうございます」

とまぁ焼けた魚を食べながら作戦を練っていた。

いつ、敵に襲われても可笑しく無いように…という事らしいの。

ナイト
「そういえば…どこに届けんの？」

マコト
「雷の国・雲隠れの里だ。そこには沢山と言っても良い程に忍びがいる。
火影様から聞いた話では狙われている…という事でしたが…」

船橋
「……そこまで聞いていたんじゃな……」

（ここからは波の里と似るかもしれません＞＜）

歌怨
「どういう事ですか？」

船橋
「イヂガコーポレクション…ガトー海運会社並の金持ち会社の奴らなんじゃが…
つい最近、わしが持つペンダントを狙っておるんじゃよ…
それがこのペンダントじゃよ」

ナイト
「何だこれ…紫色で光ってて逆に眩しい」

船橋
「だが…話によれば、ある一定の人物にしか効果が発揮しない…らしいんじゃよ」

璃南
「一定の人物？…とは？？」

船橋
「それは…おｍ（（キィィィィンッ☆」

歌怨が食べようとしていた魚に手裏剣が刺さっていた。

毒入りの手裏剣だったのか…魚がすぐ黒くなった。

船橋さんは急いでペンダントを隠すけど、手裏剣を連発で投げつけられるのも、私は船橋さんを庇い、その上から水が守ってくれていた。

ナイト
「何なんだよ…てか何気に無傷だし」

璃南
「それが、水の能力なんだもん…」

歌怨
「来るぞ」

今度は炎で焼かれそうになったが氷が大きな盾となって私達五人を助けてくれた。

???
「チッ。早く死ねよ」

マコト
「大丈夫か…」

璃南
「何とか…」

ナイト
「天野の氷で何とか助かった」

歌怨
「まさか敵がさっきの船橋さんの話を盗み聞きしてたのか??」

マコト
「その通りだな。すぐにここから出発するぞ」

何とか脱出し、早足で向かっている途中。

璃南
「（やっぱBランクは難しいね…いつ、どこから敵に襲われるか分からない訳だし…）」

マコト
「……」

歌怨
「……」

ナイト
「……」

船橋
「……」

その後、重苦しい空気の中、私達は進んだ。

だけど…行く先も…さっきから同じ道を通っている気がする…。

マコト
「嵌められたな…」

歌怨
＜＜写輪眼＞＞

マコト
「写輪眼か…どうだ？分かった事は？？」

歌怨
「……多分…幻術だ。
だけどこの幻術は写輪眼では見切れない」

ナイト
「どういう事だよッ！！！！」

船橋
「……」

璃南
＜＜劉冬眼＞＞

マコト
「（劉冬眼…やっぱ十尾の少女だな…）」

璃南
「…５０Ｍ先、出口ある。
少し行った先には敵がざっと７人」

マコト
「よし。歌怨、ナイト。戦いの準備をしておけ。
そして璃南。そのまま劉冬眼を使っていてくれ。
いつ敵が襲ってくるかが分かんない訳だ。
それと船橋さんの近くにいて、守るんだ」

璃南

「はい！！」

ナイト
「殺しても良いんだよな？」

マコト
「・・・まぁ良いだろう」

歌怨
「そんな事を聞いたとしても最初から手加減無しで行こうとしていただろ」

ナイト
「ケッ。まぁそんな所だな」

璃南
「…敵、続出」

マコト
「行くぞ」

走り出すのは良いけど…船橋さんがすごく辛そう。

璃南
「後１０Ｍ」

三忍はクナイを用意し、先に走って行く。

少し先からは戦う音がトンネルのそこまで響き渡っている。

数分して…マコト先生がやって来た。

マコト
「こっちは終了だ。どうだ？」

璃南
「……敵は雷の国周辺にいます。
今は何とか大丈夫だと思います」

マコト
「そうか。船橋さんもご無事ですか？」

船橋
「あぁ。大丈夫じゃ」

ナイト
「……マコト先生。
もう少し進むのか？」

マコト
「まだ昼間だが…ここら辺で野宿とするか。
お前達もさっきの戦いで術の使いすぎで疲れているだろう」

歌怨
「あぁ。傷も結構付けられたしな…」

船橋
「だがここら辺で野宿して襲われるじゃろう…」

マコト
「安心して下さい。こちらも幻術で寝場所を隠します」

そういうとマコト先生がテントを作り、幻術で見事に隠した。

ナイト
「あー…痛ってー…」

バッグを置くと、治療中のナイトの所に向かった。

璃南
「やるよ♪絆創膏とか、貸して」

ナイト
「……ん」

消毒中…大人しく静かにしてくれててやりやすかった。

璃南
「はい。後は絆創膏を上から張るだけだね」

冷たい冷たい氷で冷やした絆創膏を張ったら絶叫した。

ナイト
「貴様ッ（泣）俺が炎の属性だという事を知ってて…ひでぇ（泣）」

璃南
「だってね～、今の毒針があったんだよ？
まぁ私が医療忍術を使わなくとも何とか戻ったけどさ♪」

ナイト
「天野ってさ…結構Ｓだったりして」

璃南
「ナイト（怒）もっと氷で冷やそうか？」

ナイト
「あ！！今…（ナイトって…／／／）」

璃南
「ん？？何？？」

ナイト
「何でも無い。」

馬鹿話をしてたら行き成り（（バタンッ））という音がした。

マコト
「おい！！歌怨！！どうした！！」

船橋
「腕が黒くなってるわい…」

マコト
「大変だ…毒が体に回ってるぞ…」

璃南
「マコト先生！！ここにのせてください！！！医療しますので！！」

マコト
「出来るのか！？」

璃南
「任せて下さい☆これでも私は死者を甦らせれ増したし、、」

そういうと先生が歌怨を私の前に運んだ。

そのまま左腕にチャクラを集中させた。

私の気持ちに反応したのか…氷が歌怨の額近くに執着し始めた。

マコト
「助かるのか…??」

璃南
「はい。今の所、毒は少しずつだけど収まってます。
それに氷で頭を冷やしてるから早くすれば明日の朝までには治るはず…」

ナイト
「お前、いろんな意味ですげぇーなｗｗｗ」

璃南
「あ、、ありがと?」

ナイト
「素直に喜べよ」

璃南
「いやーｗｗ”いろんな意味で”ってどんな意味?って思って;;;;」

ナイト
「天然だな（笑）」

璃南
「ちょっと笑わないでよー（泣）」

ナイト
「だってなーｗｗｗ」

そんなやりとりをマコト先生が呆れ顔で見ていた共知らずに私達は楽しんでいた。

００４＊初めての任務はＢランク！！？†後編†（前書き）

雪の国・雲隠れの里まで無事に船橋さんを届ける事になった私達。

忍術学校を出て間もないのに初日からＢランクという上忍・中忍レベルの長難関任務でもあった。

そんな矢先に・・・イチガコーポレクションの忍びだと思われる奴らに狙われた。

そして、無事ナイト・歌怨・マコト先生のおかげでもあって私達は何とか脱走したものの、森の中で歌怨が倒れた。

医療忍者でもある私は7人で十分そうなテントで歌怨を治す事に。

そしてマコト先生の幻術で私達は一晩無事に過ごせれる者…

００４＊初めての任務はＢランク！！？†後編†

ナイト
「歌怨・・・治ってるか？」

璃南
「もうじき・・・日も暮れるし治るよ」

ナイト
「へへっ・・・そうか」

璃南
「休まないの？」

ナイト
「同じスリーマンセルの奴が倒れてんのに休めれるかよ」

璃南
「・・・優しいね」

ナイト
「そうか？」

璃南
「つい最近まで私達は喋っていなかったのにね・・・」

マコト
「そうだな」

2人
「Σ！！？」

マコト
「だが。その経験はこの第１１班の戦力にもなるの、知ってたか？」

ナイト
「どういう事だよ・・」

マコト
「簡単な話だ。劉冬眼を使う璃南に。
写輪眼を使い、雷を身に纏う歌怨に、
片手で印を結び、血継限界でもあるナイト。
俺達４人が力を合わせれば出来ない事は無い」

ナイト
「たまにはカッコイイ事を言うね～」

璃南
「流石は上忍・・・だね」

その時だった。

歌怨が頭を抑えながら起きだした。

歌怨
「ここは・・・??」

璃南
「起きたー!!!（（抱きつく」

私はすごく嬉しくて思わず抱きついた。

歌怨
「何だ???」

ナイト
「璃南の奴。一晩お前に付きっ切りで看病をしてたんだぜ（ニカッ」

船橋
「なんじゃなんじゃ。騒がしいのおー」

マコト

「船橋さん。歌怨が復帰しました。
これで出発出来ます」

歌怨
「璃南、、すまなかったな」

璃南
「ううん。私達同じスリーマンセルでしょ」

ナイト
「だな」

ナイトが拳を作りながら前に出した。

ナイト
「お前らもやれよ（ニカ」

歌怨もやった所で私もやった。

マコト
「おっ。俺も混ぜろ。船橋さんもやりましょう！！」

船橋
「あ、、あぁ」

マコト
「よし。この絆に誓って…絶対船橋さんを無事に送り届けるぞ！！！」

「「あぁ！！／はい！！」」

そして・・・

私達は雪が積もる中、敵に見つからないのかと心配な気持ちを抑えながら歩いた。

船橋
「あそこじゃ！！雪の国はー…」

ナイト
「おっしゃー！！！（（小声」

マコト
「お前達。気をつけて繋れよ」

「「はい／あぁ」」

《劉冬眼》

璃南
さっきからどうも嫌な予感しかしないんだよね・・・。

「マコト先生！！トラップが・・」

するとナイトとマコト先生がクナイを出した。

ナイト
「だろうな。めんどくせー」

？？？
「はっはっは。流石は忍者じゃ」

歌怨
「この声は！！？」

船橋
「・・・イチガじゃ！！！」

ナイト
「おい！！糞じじい！！隠れてねぇーでさっさと出てきやがれ」

？？

「糞じじいじゃと？」

そう言った途端、雪の中から１０忍ほどの中忍だと思われる忍者が出て来た。

その後、白ひげのおじさんが後ろから現れた。

イチガ

「おうおう。怯えてるのー」

ナイト

「勝手に言ってろ。糞じじい」

イチガ

「ガキが。今の内にほざいてろ」

キャラがー！！！

ナイト
「悪ぃけど俺ら任務中でな」

マコト
「どうやら中忍が１０人・・・という所だな。お前たち、いけるか？」

歌怨
「行けるかもな。璃南は余り舟橋さんから離れるな」

璃南
「了解」

そしてイチガという人が腕を下ろした時、忍者達が一気にやって来た。

だけど歌怨・ナイト・マコト先生達にそれぞれ三忍の忍者がいて、こっちには4忍もいる。

殴ろうとしても交互に氷と水が盾となって船橋さんと私を守っていた。

2

「何だこれは！！！」

璃南

「船橋さん！！絶対私から離れないで下さい！！」

船橋

「あぁ。。」

璃南

「ありがとうございます、、水遁・簾縛水！！！」

すると雪の中から水が出て来ては４忍の忍者を捕らえ始めた。

璃南
「悪いけど・・・はぁっっ！！！！！！！」

そういうと、四人の忍者らは血まみれとなって消えた。

船橋（唖然）

璃南
「船橋さん、、すみません；；
貴方を守る為なので；；；；」

するとマコト先生も歌怨もナイトも中忍レベルの忍者達を倒した。

船橋
「イチガ！！何故わしを狙うんじゃ！！！」

イチガ
「何故だと?それはお前が憎いからｄ（（（ドサッ」

その途中、マコト先生がとどめを差した。

マコト
「憎い・・・か。」

歌怨
「終わった、のか?」

ナイト
「ヤッフー!!!!」

船橋
「終わった、、、んじゃなー!!!!」

マコト
「あぁ。お前達もよく頑張ったな。中忍にあそこまで刃向かうとはなー…」

璃南
「はい♪」

ナイト
「どうなるかと思ったぜ」

歌怨
「最終的には船橋さんが無事でなによりだ」

マコト
「よし。船橋さんを無事に送り届けるぞ！！！」

＝そして…帰り道・船橋さんを無事に送り届け…＝

歌怨
「どうなるかと思ったが…無事に終わったな」

ナイト
「だな」

マコト

「にしてもお前達は強いな。今の所、順調に成長しているのはー…璃南だな」

璃南
「やったー！！！ナイトより成長してる～♪♪」

ナイト
「えぇ＝俺じゃないのかよっー！？」

マコト
「璃南だな。歌怨が次だな」

歌怨
「フンッ」

ナイト
「何でー！！！（ガビーン」

「「アハハハハハハ！！！！！」」

雪の積もる道のりで…私達の笑い声がこの雷の国で響渡っていた。

００５＊我愛羅！！？（前書き）

初めての任務が終わり、今度は修行に励む三忍は・・・

００５＊我愛羅！！？

マコト
「マスターが早いな。それに三忍とも、体術・幻術・忍術もきちんと上昇してるな」

ナイト
「絶対負けられないしな」

あれから…Ｂランクの任務が終わって数週間。

私達はいろんな任務をこなして来た。

時にはＣランクもやったり…Ｄランクもやったり…Ｂランクはもう一度やって…一日に２回ぐらいは任務に出かけたまでだった。

そして…私達は腕を挙げる為”幻術・体術・忍術”の特訓をしている。

マコト
「初日に比べて良く腕を上げてるなー」

ナイト
「おっし！！」

歌怨
「まだまだ行けるな」

璃南
「うん♪」

マコト（あれは…もうこんな時期か…）
「あー、悪いが俺は用が出来た。てことで解散」

そういい、マコト先生はどこに行っちゃった…

璃南
「ねぇ、木の葉でも回らない？？
ついでにお餅とか食べたり↑」

ナイト
「いいかもな♪修行後の餅はサイコ～だ→→」

歌怨
「悪いが俺はｍ（（「歌怨がいないとスリーマンセルの意味が無い

でしょー」ちょΣ」

私は二人の腕を掴んで歩きだした。

璃南
「あっ！！あそこのお餅屋さんなんてどう？？」

ナイト
「おっ！！行こうぜ」

歌怨
「おい；；；；」

看板に誘われて角を曲がった時、足が止まった。

サスケ
「へぇ～砂漠の我愛羅ね～」

我愛羅
「俺達は行く……！！？」

ナイト

「何だアイツら??あの額当てからして砂の奴らだよな」

歌怨
「あぁ」

璃南
「ナルト〜、何してるの〜??」

私は歩きながらナルトの名を口にした。

サクラ
「あっ、璃南!!ちょっと聞いてよ…」

ナルト
「璃南姉ちゃん・・」

木の葉丸
「ナルト兄ちゃん・・・弱すぎるぞ!!コレ!!」

璃南
「ちょっと一人ずつ言ってよ・・」

そう言った時だった。

冷たい視線に気付いて、そっちの方を見ると我愛羅が私を見ていた。

サクラから事情を聞いて、私は三忍に向き直った。

璃南
「木の葉丸君がぶつかった事は謝ります。
だけど…中忍試験前に殺すようなそんな真似をすれば確実に貴方達は一生下忍のまま。
だから大人しくこの場から離れて下さい」

テマリ
「……」

カンクロウ（良い奴じゃん・・・／／／）

我愛羅
「……あぁ。そのつもりだ。悪かったな。…璃南」

そういうと我愛羅達は消え去った。

だけど…どうして我愛羅は最後に私の名前を…口にしたのッ！！！

あの時…我愛羅は…

ナルト
「璃南姉ちゃん・・中忍試験って何だってばよ？？？」

璃南
「下忍から中忍に上がるテストのような者だよ。
もう少ししたら中忍試験が行われるの。
それで各里から中忍候補の者がこの木の葉にやってくるの」

ナイト
「だけど何で璃南が知ってんだ？？」

歌怨
「この間、マコト先生が言ってただろ」

ナイト
「そうだっけ？」

璃南
「その時、ナイト負傷で聞いてなかっただけだと思うｗｗ」

ナイト
「何だソレ」

＝時は過ぎて…中忍試験当日＝

ナルト達も中忍試験に出る事となり、私も張り切っていた。

（すみません；；璃南⇒莉奈に変更です）

莉奈
「ナルトー、私先行ってるー」

ナルト
「了解だってばよ」

印を結ぶと、風と共に消えた。

００６＊第一回目のテストは筆記！！？（前書き）

何とか中忍試験の志願書を出す為に忍術学校に入った者の・・・・・・

００６＊第一回目のテストは筆記！！？

莉奈
「始まるね～。確か３０１だっけ」

ナイト
「おぅ。・・・って何やってんだ？アイツら」

歌怨
「・・・ただの幻術に過ぎない。先に行くぞ」

莉奈
「了解。ナイト～、行くよ～」

ナイト
「あっ、おい待てよ！！！」

私達は幻術で止まってる候補者達を見て、何も無かったように上の階に上る。

中忍試験の本会場でもある３０１号室前にマコト先生が出迎えてくれた。

莉奈
「あっ。マコト先生」

マコト
「ほぅ。上忍の幻術を見破ってここまで来たんだな。関心関心。流石は俺の教え子だ」

ナイト
「んで。先生は何をしに来たんだ??」

マコト
「志願書を持って来たな。それを貰いに来たんだ」

志願書を渡すと先生は微笑ましい笑顔を見せながら私達を送りだした。

中に入った途端・・・沢山の視線を浴びた。

莉奈
「無視))前の方に座ろうよ。うん。決まり」

どうせ何かを言われる前に私は二人の腕を掴んで中間ぐらいの席に

座った。

莉奈

「……やっぱ他の席にｓ（（「何だよ！！お前！！！酷いじゃん！！！」何でいんの。。。」

皆さん。お分かりでしょうか。最後の”じゃん”で。

砂の三忍組がいたコトに気付かなかった私…。

だけど＊カ＊我＊テ＊って感じだから良いんだけどさ…隣が我愛羅じゃないからさ…

こう見えても私。まだ我愛羅が少しだけ好き…だけど、認めたくない自分もいるというか…

歌怨

「まア良いだろう。もう席は空いて無いようだしな」

という事で＊歌＊ナ＊莉＊カ……という順番に。

はア・・・。今日は付いてないかも↑

そしてさっきから溜息連発中。

カンクロウ
「お前・・・さっきから酷いじゃん？」

莉奈
「人生山アリ谷アリとかよく言うでしょ？それと同じ☆」

ナと歌（出たよ。莉奈の嘘作戦）

通用すると思ってたけど逆効果だった。

反対に頬を抓られた。

莉奈
「はなひぇ！！！ばひゃばひゃ！！！（離せ！！！馬鹿馬鹿！！！）
」

＝ＩＮ４分後＝

莉奈
「痛っーい（泣）何すんのさ！！！」

カンクロウ
「こっちは傷ついてるじゃん」

莉奈
「知らないよ。そんなの」

私は両頬を両手で抑えながら涙堪えていた。

ナイト
「大丈夫か？」

莉奈
「大丈夫じゃない。場所変わって」

ナイト
「はっ！？」

そういう事で私とナイトが入れ替わり…カンクロウとテマリが入れ替わった…何故に！？

テマリ
（結構良い男が二人もいるじゃない／／／）

ナイト
（女って莉奈以外皆同じだ）

案外可哀想なナイトだったけど・・・その途中ナルトの大声によって我に帰った私↑

これから先の事を考えすぎて自分の世界に入ってた私ｗｗｗｗ

ナルト
「俺の名はうずまきナルトだッ！！！いずれ火影の名を受け継ぐ男だってばよ！！！」

莉奈
「ボソ）） あの馬鹿。一気に敵が増えちゃってるよ；；
ナルトらしくて良いけどね（（えｗ」

歌怨
「だな」

＝ＩＮ数分後＝

サスケ
「ついでに天野莉奈についても調べてくれ」

カブト
「あぁ。……彼女のチームには音殺歌怨に闇月ナイト。司令官の雨野マコト。
今分かるのはそれだけだ。全てが不明になってるよ」

ナルト
「流石は莉奈姉ちゃんだってばよ♪」

それから…第一回目の筆記テストが始まった。

莉（暗号…こうなるんだね…）

と、真剣にやってると思うけど…集中出来ない。

隣が隣だから↑

隣はなんと……カンクロウなんだよね…。

ますますついてない私。

だけど斜め前には我愛羅がいてその前にはナイト。

私の斜め後ろ左には歌怨とテマリが座っている。

確かカンニングをすれば、失格か持ち点から引かれる…。

だけどこんな問題、ナイトはほぼ解けないはず。

この間《筆記テストはお断りッ！！！》とか言ってたし…それだったらナルトも解けないはず。

どうにかしてでも私達三忍の持ち点を減らさせない方法・・・。

《忍者は裏の裏を読むべし》

裏の裏って何！？

裏…裏…

《忍者らしく》

忍者…

《裏の裏を読む》

・・・成程。そういう事ね。

《劉冬眼》

『ナイト。歌怨』

ナ『何やってんだよ（汗）』

歌『忍者は裏の裏を読むべし。だろ？』

莉『そういう事。私が答えを言うから。書いて』

ナ『流石は莉奈だな♪』

歌『頼む』

莉『了解。まず一問目はー…』

そうして…

ナ『解けた！！サンキュー、莉奈。歌怨』

歌『礼なら莉奈にするべきだ。何としてでもこの試験は突破するぞ』

莉『了解』

ナ『勿論だ』

そして無事、第一試験・筆記テストも無事に終わり第二試験管の後に着く私達。

《死の森・前》

ナルト
「すげー・・」

アンコ
「ここは通称・死の森よ。第二試験はこの森で五日間を過ごして貰うわ。
その目的は天地両方の巻物を灯台に三忍で持ってくるのよ」

そして一旦解散となり、、、次の日。

歌怨
「早いな。誰が持つか？」

莉奈
「ここは…意外性Ｎｏ１のナイトにする？」

ナイト
「はい？」

歌怨
「良いかもな。巻物を頼むな」

ナイト

「おい！！ちょい待てよ！！」

と、私達はそのまま巻物を貰いに行った。

ナイト《成程。そういう事か》

莉奈
「あっ、今の所空いてるのは４４番だね」

ナイト
「マジで巻物誰か持てよ～」

歌怨
「無視）） 急ごう」

ナイト
「無視すんな（怒」

莉奈
「まぁまぁ（笑）ナイトが持ってたほうがこっちとしてはすごく助かるよ。（本当は私が持ってるけどね）」

＝開始＝

歌怨
「とりあえず、灯台に近い場所に向かうぞ」

二人
「ラジャー☆」

移動中、私が何かの気配に気がついた。

《誰かいるよ。後ろから来るよ》

《変わり身だな》

【変わり身の術】

私達は樹木を超えるとその影に隠れた。

影使いでもある歌怨が幻術で見破られないようにしてくれたんだ。

そして私達の分身が誰かに襲われた。そしてクナイで殺された…が…

（（ボォォォォンッ

男
「チッ。どこに逃げやがったー！！！」

ナイト
「ひでぇーやり方だなー」

男2
「チッ。地の巻物を持ってンのかぁ！？」

莉奈
「持ってない…って言ったらどうするの？」

男3
「殺すまでだッー！！！」

＝飛ばして…灯台＝

上忍
「ただいまのタイム・・・10分25秒29・・・です」

歌怨
「案外早く終わったな」

ナイト
「だな」

上忍
「天と地の巻物。両方持ってるな。後は好きにしてもいいぞ。第三試験会場にも向かっても宜しい」

莉奈
「いえ。弟達の手伝いに行きます♪」

ナイト
「何なんだよ!!!毎回毎回!!!待ってくれよ!!!」

とかいいつつも先に行くナイトって;;;;

００７＊大蛇丸、現る！！？（前書き）

早くも天地両方の巻物を、獲得し灯台に急ぐ莉奈達。

一番のりで１０分２５秒２９という在り得ないタイムで第二試験を終わらせた。

そして、ナルト達の元に急ぐ三忍であった。

００７＊大蛇丸、現る！！？

莉奈＊（何なの・・・さっきからこの嫌な気配は・・・）

ナイト
「おぃ莉奈。どうしたんだよ。そんなに急いで・・・」

歌怨
「何かあったのか？」

莉奈
「分からない・・でも嫌な予感がするの・・」

【劉冬眼】

サクラ
『サスケ君！！！しっかり！！！』

これは・・・？

莉奈
「音隠れ？・・・違う。あの人じゃない・・・じゃぁ誰？」

？？？
『サスケ君は必ず私を必要とするわ』

莉奈
「・・・まさか・・・・」

だけど・・・アンコさんが確か・・・確認したはず。

アイツが・・・大蛇丸がいるはずは無い・・・。

歌怨
「どうだ？」

莉奈
「もしかしたら、、、大蛇丸がこの試験・・いや・・・この死の森にいる！！！」

ナイト
「はぁっ！？」

莉奈
「サスケに呪印が付けられた。急ぐしか無いよ。もしかしたらあの呪印が暴走しかねないよ！！！」

歌怨
「あぁ。急ぐぞ」

ナイト
「糞・・・」

莉奈
「私さ。こういう時の為に新技を考えたの！」

ナイト
「新技？」

莉奈
「名付けて。超高速なんだよ。ちなみに私の忍法♪」

歌怨
「試す価値はありそうだな」

莉奈
「行くよ。莉奈忍法・桜蘭走櫂！！」

すると、三忍の足元が風のように速く走れるようになった。

まるで逃げ足が速い鷲のようにね。

ナイト
「おっ！！見えて来たぞ！！！」

莉奈
「あっ！！あれって音隠れの奴らじゃん！！！」

私は速度を上げて、リーさんがやられそうになった時、痩せ細った奴を蹴り飛ばした。

サクラ
「り・・莉奈っ！！！」

ナイト
「お前さー…弱すぎだろ？」

莉奈
「ちょっとナイト！！！サクラだって頑張ったんだからそういう事

を言っちゃ駄目でしょ」

ナイト
「お前もそう思わねぇーか？」

歌怨
「ただ単にお前が馬鹿で強いだけだ。」

莉奈
「歌怨に一票！！」

ナイト
「うわっ。ひっでー」

サクラ
「・・・私だって・・・・」

ナイト

「・・・まぁお前もアイツらの為にも頑張ったんじゃねーの。そこまでして、守りたかった。そこは認めてやるよ」

莉奈
「素直じゃないね」

ナイト
「うるせぇーよ」

サクラ
「／／／／／／」

歌怨
「それより、敵を怒らせてるみたいだぞ」

ザク
「糞女め・・俺を蹴り飛ばしやがって・・」

莉奈
「あっ、私？」

キン
「何なのよ！！」

莉奈
「普通の木の葉の忍びだけど？」

ナイト
「噛み合ってねぇーよ！！」

莉奈
「そう？まぁーいいや。私、三人の医療するから後はよろしく♪」

歌怨
「まぁ良いだろう」

ドス
「キン！！あの女を捕らえろ！！」

キンという人が高速で向かったらしいけどナイトが片足で蹴り上げ、見事に樹木にぶつかった。

ナイト
「ここから先は行かせねーぞ」

歌怨
「まぁ行かない方が身の為かもな」

ドス
「・・・２ＶＳ３。これじゃー、そっちが不利だな」

歌怨
「力ではどうやらこっちが上だな」

莉奈
「サクラも治療するから横になって」

サクラ
「いいの??行かなくて・・」

莉奈
「大丈夫。あの二人は強いよ。あの二人なら・・」

【影分身の術】

莉奈
「よし。これで三人に分ければすぐ治るよ」

サクラ
「私って・・・本当に弱いね・・・」

莉奈

「そんな事無い。サクラは・・強いよ。」

サクラ
「だって・・大蛇丸にだって・・・」

莉奈
「ナイトが言ってた”弱い”はね・・・サクラがグジグジしてるからだと思うの。
人にばっかり頼って、いつかはその人達も倒れて最終的には死ぬ。
力無い者は殺され、力ある者は上に立って行く。
だけど、サクラはリーさんが倒れて、ナルトもサスケも負傷で・・・
サクラは命賭けで二人を守った。
良い事だと思うよ。ナイトだって”そこは認めてやる”って言ってくれたでしょ？
だから自分を信じて。必ずその願いは叶うから」

サクラ
「・・・うんッ・・・ありがと・・・」

だけど、二人が心配。

歌怨
「雷遁・豪電柱！！！」

すると上からいくつもの稲妻がドスとキンの体にめがけた。

キン
「ゲホッ・・」

ナイト
「チッ。足が速ぇー奴だぜ」

ザクという人がナイトの周りを風のように走りながら音波を撒き散らしていた。

ナイト
「糞うぜぇー。てか何だよ。この音波」

莉奈
「ナイト！！！タイミングを計って火遁を使って！！！」

ナイト
「・・了解。」

ナイト（1・2・3）
「火遁・炎導豪炎の術！！！！」

すると、一気に炎がザクという人に飛び散った。

莉奈
「よし」

その時だった。サスケに掛かってた呪印が・・・発動した。

「「キャー！！！」」

思わず、吹き飛ばされそうになる私とサクラ。

それに、ナルトも苦しそうにもがき始めた。

私はナルトの元に急ぎ、抱き抱えて木の上に行った。

莉奈
「ナルト！ナルト！！しっかり！！」

ナイト
「完璧に気絶してやがる」

歌怨
「どうする。このままだと、サスケはアイツらを倒しかねないぞ」

莉奈

「だけど、、サスケを止める事が出来るのは・・・」

ー…ナルト……と……

ナイト

「だけどどうすんだよ!!コイツ（ナルト）は気絶してんだぞ!!」

歌怨

「…どうにも…!!!!」

その時だった。

サクラがサスケに抱きついていた。

まだ、治療中でサクラだって立つのがやっとのはず…なのにサクラは立って、サスケを止めた…。

その光景を見ていたいのは物凄く嫉妬していた事だろうー…w

いの

「サスケ君に泣きながら抱きつくなんて…やるわね^言^」

サクラ
「フンッ。アンタなんかにサスケ君は譲らないわよ＜言＜」

莉奈
「いの！！変な事を話してないで切る事に集中しなさいよ！！」

いの
「はぁーい…」

サクラ
「（（ドヤァ））」

いの
「（（イラッ））」

サクラ
「♪～♪～♪～」

今のやりとりは見なかった事にしようかな…；；；

＝ＩＮ次の日＝

ナイト
「あー…暇すぎだぜー…」

私たちは確かに早く終わったけど、最後まで上忍の話を聞いていなかった為…今日はもう中忍試験合格発表場に行く事となった。

そして今はー…長ったらしい廊下を歩いてる所。

私の頭の中にはナルトの事だらけ…

「無事に地の巻物を取れたかなー…」とか「巻物は開けてないよね???」とかとかッー!!!

莉奈
「はぁぁー…」

歌怨
「…どうした?」

莉奈
「…何でも無い…」

本会場に入ろうとした時だったー…

前から我愛羅達が通って来た。

通って来た…というより、通ろうとしていた。

だけど私を見る我愛羅の目が本当に冷たかった…。

その場を我愛羅が通り過ぎて行った。

（やっぱり私なんか…綺麗さっぱりに忘れちゃったのかな…それなら、あの日…マコト先生との修行が終わって三人でお餅を食べに行こうとして、再開したあの日…我愛羅は確かに小声だったかも知れないけどちゃんと「「莉奈」」って…じゃぁ…なんで…）

ナイト

「まぁーいいや。行こうぜ」

中に入るなり…途端に声が鳴り響いた。

??

「か～お～ん～く～ん！！！！（（（抱き付く」

？？

「ナイト君ー！！！逢いたかったよー！！！！！」

ナイト

「火遁・錘艶聞の術！！！！！」

解説！！

火遁・錘艶聞（すいえんぶん）の術は…

霞炎舞の術と似て、印を組み、口から霧状の物質を吐いて（砂とか石？）相手を攻撃する。

ナイトお得意の錘艶聞の術で二人がもっとも嫌がっている鈴鹿達を蹴散らした。

？？

「何するのよっー！！！！」

こっちは狐目鈴鹿。（きつねめ・すずか）

歌怨が大・大・大好きな取巻きの一人。

実力は忍術学校時・ナルトよりも下だった。（（今回、生きてる事が奇跡…ｗｗ））

？？

「でもそんな所がかっこいい～！！！」

そして駁璽結羽袈（まだらめ・ゆうか）

ナイトが世界一で大好きだという…

紹介は…これぐらいかな？ｗ

（名前）

「それじゃー…邪魔者は消えるね」

満面の笑みをしながら、私は二人をおいて窓から飛び降りた。（下はコンクリート！！！）

ナイト

「キメぇーんだよッ！！！近づくな！！ブスッ！！！」

結羽袈

「えぇ～！！！（涙目）

そんな酷い事を言わないでよっー！！！」

＝ＩＮ莉奈は＝

莉奈
「んー！！！風が気持ちぃー！！！！」
私はこの灯台の屋上に来ていた。
確かに二人の邪魔はしない方が良さそうだったし…我愛羅の事でも少し考えたかったし…。
『我愛羅ッ～♪』
『なぁに？』
『大好きッ～♪』
『チュッ））』
『／／／／／／』
今でも甦るあの昔の頃の光景…

あの頃の我愛羅は本当にー…

莉奈
「ボソ））可愛くて優しかったのに…」

？？
「優しい…良い言葉じゃん？」

莉奈
「そう思uΣ！！！！！！！！！！？？？？？？？？？？？？」

『ガタンッ！！！』

私は吃驚しすぎて、近くのパイプに腰を打った。

莉奈
「痛っーい（泣）！！！！！！！！
何なの！！！！！脅かしてー！！！！！！」

カンクロウ
「悪気は全く無いじゃんw
通りかかったらいた…みたいな？w」

（※）

莉奈（本当、陰が薄いんだからー…）
「そういえば…我愛羅とどんな関係？」

カンクロウ
「兄弟」

莉奈
「はぁっ！！？兄弟！！！？似てなッ！！！」

カンクロウ
「似てないとか言われると傷つくじゃん？」

莉奈
「大丈夫ｂ　カンクトロウは心の広い人だからｗｗ」

カンクロウ
「…（（ブチッ。
カラス＜言＜」

莉奈
「あー！！（汗）
ごめんなさいー！！！」

カンクロウ
「／／／／／／」

莉奈
「私の顔に何か付いてるの？↑」

カンクロウ
「（鈍感…じゃん…／／／／／）」

そんなカンクロウの行動が気になりつつも、逢えて無かったかのように見過ごした私。

放送
『第二試験終了致しましたので、お集まり下さい』

莉奈
「もう…？…まぁ第三試験も頑張ろッ♪」

私が走り出そうとした時だった。

「あのさー…」振り返ると顔を真っ赤にしながら、呼び止めていた。

カンクロウ
「その…第三試験…頑張ろう…みたいな…／／／／／」

莉奈
「・・うん！！じゃぁー、後でね＾＾」

その後のカンクロウはというと…。

カンクロウ
（俺の馬鹿ッ！！アホ！！！何やっちゃってんだよー！！！）

と、自分の頭を叩いていた。

莉奈
「到着～♪」

？？
「莉奈姉ちゃーん！！」

と、言いながら誰かが抱きついて来た。

莉奈
「ナルトー・・第二試験、クリアしたんだね＾＾」

ナルト
「その通りっー！！姉ちゃんが最初？」

莉奈
「うん＾＾一日目に終わったよ～」

サクラ
「えぇー！！私達なんかついさっきだよ（哀）」

莉奈
「そうなんだwでも、それだけ巻物取りに時間が掛かったんだね・・・w」

その時、私は何かを察知した。

誰かが私を見ている…。

でも、誰が？

この冷たい目つき…覚えてる…まさか…

トントン

莉奈
「！！！」

マコト
「どうした？莉奈？そんな顔をして」

莉奈
「マコト先生・・・」

マコト
「？？？」

莉奈
「何でも無いです；；；」

＊００８＊幻覚

莉菜
「きっと何かの幻覚…うん…幻覚だっ！」

と、私は蹲って呪いの呪文のように唱えていた。

ナイト
「はぁ？何が幻覚なんだ？」

莉菜
「あー…もうー…最近、目が可笑しいよー（泣）」

ナイト
「はぁ？」

と、ナイトは何がなんだかさっぱり分からない様子だった。

莉菜
「もう駄目！頭が回らない！」

と、嘆いていた時、冷たい視線が向けられてる事に気付いた。

視線の先を見ると、腕を組みながら壁に寄り掛かりこちらを見る我愛羅がいた。

莉菜
「あー！！（泣）我愛羅とだけは戦いたくない…」

歌怨
「きっと当たるだろう」

と、地獄耳でもある歌怨が即答で言い返して来た。

莉菜
「１００％？」

歌怨
「１００％」

莉菜
「だから即答しないでよー（泣）」

マコト

「莉菜。大丈夫だ。お前なら、出来る。そうだろ？」

ナイト
「おい…マコト。ちぃっとズレてるぞ（呆」

歌怨
「ナイトに同感だ」

マコト
「まぁ…お前なら、きっと中忍になれる。大丈夫だ。自分に自信を持つんだ。
何たって俺の教え子だろ？この俺がついてる限り、お前達は絶対に中忍になれる」

と、言ってまさかこの言葉が本当に現実となって、証明されるとは誰もが思わなかっただろう…。

そして一回戦目はサスケの勝ちで勝負は次第に進み、９回戦目に突入した。

九回戦目、ナルト対キバの戦いとなった。

莉菜

「んー…ナルト、だね。勝つの」

リー
「そんなの分からないですよ！！戦ってみないと！！！」

ナイト
「コイツ（莉菜）の運は良く当たるんだよ。
１００％中９９？はな。外した事すら、余りねぇーから、ナルトの勝ちなんじゃねーの？」

リー
「そんな…」

ヒナタ
「ナルト君…キバ君…」

そして、さっきから嫌な気配がするけど、誰だかはもう百発百中で分かる。

絶対に…この木の葉に、大蛇丸がいる。

だけど他の人達は気付いてない様子…マコト先生や、三代目火影様までも…。

ここは、様子を見るしかないかな…。

（飛ばします＞＜）

残るメンバーは、私と歌怨とナイトと、リーさんとチョウジ。

それに、我愛羅と音隠れが一人。岩隠れが一人で、草隠れが二人残っていた。

私的には、我愛羅と音隠れの人とだけは戦いたくないかな…。

我愛羅は…流石に、戦えないし…音隠れの人は、ナルトたちを襲った張本人でもあり、見る限り大蛇丸の部下だというね…。

だからといって、岩隠れの人と草隠れの人が弱いとかそういうのじゃないんだよね…。

あれこれと考えてる内に電脳掲示板には名前が映し出された。

途端には大声で叫びそうにもなった程だった。

【アマノ・リナＶＳサタケ・ユウ】

莉菜
「何で！！？」

ナイト
「仕方ねぇーだろ。まぁ、さっさと行けよ」

マコト
「大丈夫だ。いざとなれば、助けに行くから」

いや、別にそこまで弱くはないかな？↑

そう思いながら、私は何メートルもある高さから飛び降りた。

着地の際には、少し水が庇ってくれた痛みも和らいだ。

カンクロウ
「お手並み拝見と、行くか」

ナルト
「姉ちゃーん！！！頑張れっー！！！」

私が笑顔で応えると共に、審判が笛を鳴らした。

ユウ：「俺はユウ。テメェーを倒して中忍になってやる」

莉菜：「アハハ＾＾；；；；まぁ、私も中忍になりたい訳ですしね…」

と、言うとクナイが飛んできた…が、軽々と水が庇い、クナイを破壊した。

ユウ：「土遁・泥胞子！！」

下忍で土遁を！？しかも、上忍レベルの！？

と、思いながらも水・氷が守り跡形も無く土が負けた。

ユウ
「想定外だな…貴様は血継限界の者か？！」

莉菜
「んー…ちょっと違うかな。私は血継限界なんかじゃないよ。
私のチームメイトにならいるけどね^^
まぁ、今度はこっちからやらせて貰うね」

印を素早く結び、口にした。

莉菜
「沸遁…霧氷獄(きりえいごく)」

すると一気に私達の周りが、白い霧に包まれた。

きっと二階からはどこに誰がいるのか分かるぐらいに、霧は薄い。

だけど、印を結ぶ事に霧が濃くなっていく。

そして後に、攻めて攻撃をするというのが今回の作戦。

莉菜
「水化の術!!!」

すると、敵の周りに二〜三体の私の水分身が現れた。

相手は気付いてない様子。それどころか、視界が見えなくて困っている様子だった。

莉菜
「水遁・豪水腕の術！！」

一気に腕に水分を集め、それを敵に向けて発射した。

前後左右からも強烈な水を食らい、おまけに視界がゼロで身動きも取れなく、霧を消し去ると相手は気絶していた。

莉菜
「簡単に終わっちゃった（ボソ」

ハヤテ
「天野莉菜、勝利」

印を組んだ状態で、胸の前に当てると体が水となって消え、その水がマコト先生たちの元に行き、元の姿に戻った。

ナイト

「もっと斬新にやろーぜ？龍駕刀とかさ、使えば良いだろ？」

莉菜
「絶対に駄目だってば！初代水影様が私に託した大事な刀なんだから！！」

ナイト
「んじゃー、いつ使うんだよ」

莉菜
「いつかは必ず使うよ☆」

そういうと、ナイトに頭を殴られた。

莉菜
「最低ー！！！女の子を殴るなんて！！！」

ナイト
「貰った刀をいつまでも使おうとしねェーからだろーが！！！」

莉菜
「大事な大事な大事な刀なんだよ！？」

歌怨
「五月蝿いぞ。お前ら。そして、ナイト、次だ」

歌怨の言葉に、私とナイトが電脳掲示板を見るとそこには【ナイトVSオダギリ】と書いてあった。

ナイト
「おっしゃー！！暴れられるー！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8073w/

NARUTO ～ナルトの義理の姉は十尾の少女であって最強忍者～　♪♪

2011年11月12日16時30分発行